

「伝統的」という表象の持つ問題性

— 美山町芦生地区を一つの事例として —

湯 川 宗 紀

要 旨

本稿では美山町芦生地区について行った調査をもとに、芦生についての語り、ツアーガイドの話・雑誌『AERA』の記事・内発的發展論を元にした芦生の分析、この三つの語りを取り上げ、この三つの語りのなかで語られる過度に強調された差異の虚構性を批判的に論じ、これら三つの語りに共通する構造を分析する。そしてこれらの語りのなかで共通して中心的に用いられる「伝統的」という言葉に注目し、この「伝統的」という言葉の持つ意味を考察する。また都市と地方の関係において「伝統的」という言葉がもたらす、内なるオリエンタリズムによって隠蔽される問題点、都市と地方における支配関係、権力関係を自省的、批判的に論じていく。

キーワード：美山、芦生、都市と地方、表象、伝統、支配、権力

はじめに

戦後の産業化、経済至上主義により都市部はもとより、その周辺地域、農山村部に対する資源の収奪、乱開発による環境破壊は農山村地域を疲弊させ続けていった。だが90年代に入りバブル経済が崩壊し、財政的経済的理由により乱開発（公共事業によるダム建設や道路の建設等も含む）が行き詰まりをみせ始めた。乱開発の行き詰まりは荒廃した農山村地を域露呈させ、都市住民をも含む生活者の生活環境への危機意識を強烈に印象づけることとなった。

このような状況はアウトドアブームやエコロジブームとあいまって自然環境、伝統的な生活、非都市的な生き方等の大切さ、に対する関心が急激に高まってきた。関心の高まりは自然環境、伝統的な生活、非都市的な生き方等に対す

る語りを生み出し、その語りは年を追うごとに多く語られるようになっていった。その結果自然環境や伝統的な生活を守り、保全していくことへのいちおうの理解は得られてきたように思える。

だが、当然のことながらここに、語る側と語られる側という関係が生じる。これまで環境、農村、あるいはそこで暮らす人々に関しても声高に叫ぶのは往々にして都市に住む側の人間であった。その語りの過程では、独善に陥ったり、語られたものと語られるものの乖離を生み出すこともままあった。太田によれば「イメージを生産し表象する側も、またそのイメージによって表象される側も、イメージは操作の対象として存在するから、それを操作する権利をめぐっての闘争も発生」することにもなる。(太田：2001. p60)

語る／語られるという問題に関して、私も含め誰かが誰かを表象する権利は当然ないし、また代弁者たり得ることもない。何かについて語るということは、語る／語られるという政治性からまぬがれることはたしかにできない。だが、様々な視点からある事象について語ることが増えれば増えるほど、語りの多様性がある事象に対し多様な解釈をもたらすことになり、事象総合的な把握近づけるのではないかと考える。よって、本稿は都市に住む他者から見た芦生についての一つの解釈ということを自省的にとらえながら、グリーンツーリズムを町おこしの一つとして積極的に過疎地の活性化を行い、数々の賞を受賞し、町おこしの成功例として紹介されることの多い京都府美山町の芦生地区における調査をとおして得た知見を元に、芦生についての語りを批判的に考察し、その語りのメカニズム、語りによって隠蔽される様々な問題点に焦点を当て、都市と地方の政治性について考えていきたいと思う。

京都府美山町・芦生原生林・芦生地区についての概略

美山町

京都府美山町は京都府のほぼ中央部に位置し(図1参照)、町域面積が340.47km²あり、京都府内町村では最大の面積を有する。美山町は1955(昭和30)年町村合併促進法により知井村・平屋村・宮島村・鶴ヶ丘村・大野村の五ヶ村が合併して誕生したものであり、現在も旧五ヶ村は美山町内で自治会という形で

残っている。(美山町：2001. p 1)

人口は美山町も全国の中山間地域農村と同様に過疎化と高齢化が進み(表1参照), 合併当時10,182人いた人口が1965(昭和40)年には8,048人に落ち込みその後も減少を続け, 1990(平成2)年には5,478人と半減した。1990(平成2)年以降人口減少には歯止めがかかり, 1995(平成7)年は5478人であった。しかし, その後少子高齢化が進み, 2000(平成12)年には

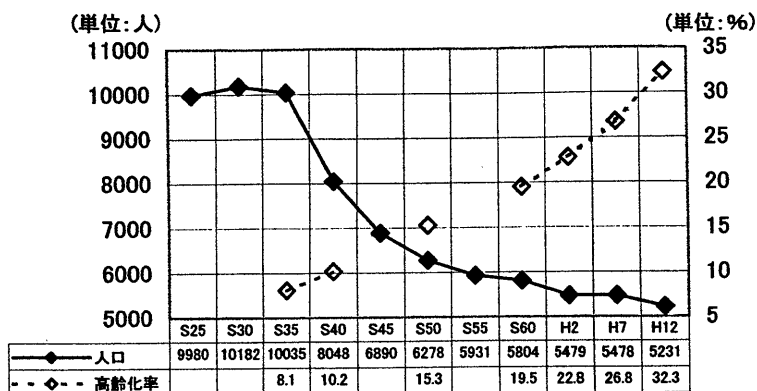
247人減の5,231人となっている。高齢化率も1965(昭和40)年には10.2%だったものが2001(平成13)年には32.36%と激増している。(同上:p2)

この1990(平成2)年以降人口減少に歯止めがかかった理由として宮崎は「平成元年以降のグリーン・ツーリズムの展開」を指摘している。(宮崎:1999.

図1



表1 人口と高齢化率の推移

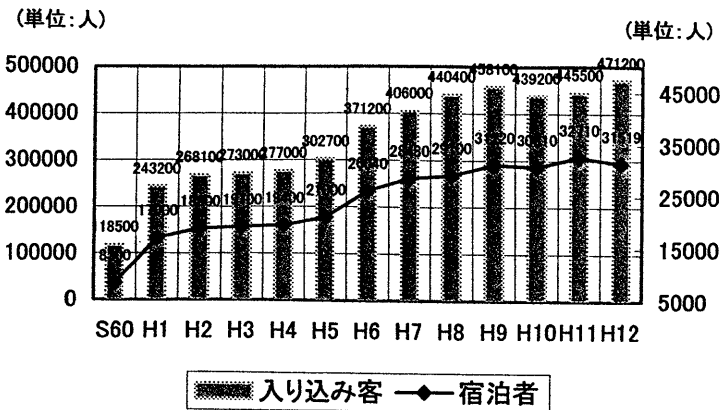


p139)

美山町は1988（昭和63）年国土庁・（財）農村開発企画委員会主催による「第3回農村アメニティーコンクール」で優秀賞を受賞している。1989（平成元）年、国の「ふるさと創世」事業と呼応する形で、役場内に「村おこし課」を設置し、この年を「村おこし元年」と位置づけ、村おこし事業を展開してきた。それ以後美山町は数々の賞を受賞し、¹⁾ また1993（平成5）年には美山町内の旧知井村地区にある「北集落」が茅葺き民家とその周辺の景観を評価され、国の「重要伝統建造物群保存地区」に選定されることになった。これらの結果美山町を訪れる人が増え、（表2参照）町内での新たな産業（交流産業）²⁾ を生みだした。さらに町内に定住を希望するいわゆるIターン者は町が本格的に受け入れ態勢を整えた1992（平成4）年から2001（平成13）年3月までに63世帯222人（15歳以下70人）にものぼり（美山町：2001. p5）過疎地、の町おこし成功事例として全国的脚光を浴びるようになった。

美山町は現在自らの町を「美しい日本の原風景を残すかやぶき民家と清流の里」と位置づけ町おこしを積極的に押し進めている。この「美しい日本の原風景を残すかやぶき民家と清流の里」とはなにも茅葺き集落だけを指すものではなく、その周辺の田園風景、山、川、そして芦生原生林をも含むのであると役場の職員は語る。

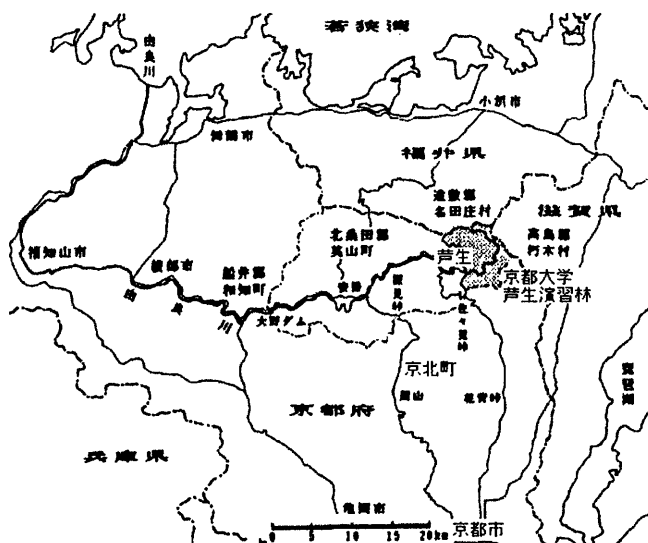
表2 観光入り込み客



芦生原生林

芦生原生林とは、美山町の旧知井村地区を形成する十一ヶ字の一つ芦生地区にある京都大学芦生演習林のことを指す。(図2参照) この演習林は1921(大正10)年に京都大学(当時の京都帝国大学)が学術研究及び実習に使用する目的で旧知井村共有林の一部の地上権を設定し99ヶ年の借地契約を土地所有者の代表として旧知井村村長と結んだのが始まりである。この演習林は広さ4200haにもおよび、京都府北部を日本海へと流れる由良川の最上流域にあたる。植生は温暖帯上部から冷温帯下部にまたがり、太平洋側と日本海側に分布する種が混生し植物の種類が多く、生物学的な価値の高さは、1931(昭和6)年に当時の東京帝国大学、中井猛之進教授によって発表された「植物ヲ学ブモノハ一度ハ京大ノ芦生演習林ヲ見ルベシ」(中井: 1931. p273-283) というタイトルの論文からもうかがうことが出来る。標高1000mにも満たない山にブナ、トチなどの広葉樹の原生林が残っているのは西日本では芦生だけだと言われ、現在も芦生原生林では巨大なスギの群生地が発見(京都新聞 1998.6.17)や、芦生の名を冠したアシウテンナンショウやアシウスギといった固有種が存在し、その自然の豊かさを誇っている。(美山町史編集委員会: 2000. p128)

図2



ところが、1960年代のはじめ頃この芦生演習林と地元の芦生集落が水没対象地区となるようなダム建設計画が持ち上がる。この計画は地元住民の同意が得られず失敗に終わるが、これを機に幾度もダム建設計画が立ち上がることになる。³⁾ このようなダム建設計画に終始反対し続けてきたのが地元の芦生集落に住む人々である。芦生に住む人々は1968（昭和44）年「ダム建設反対期成同盟会」、1980（昭和55）年「住みよい地域づくりを考える会」、1984（昭和59）年「芦生の自然を守り生かす会」と名称を変えながら、ダム建設反対運動を展開してきた。⁴⁾

芦 生

芦生は旧知井村の最奥に位置し、北は福井県名田庄村、東は滋賀県朽木村に接する。芦生に通じる道は芦生より先は一般車両通行止めとなるまさに最奥の地である。広さは約5200haあるが（そのうちのほぼ80％、4200haは演習林）林野率が99.9%にもものぼり、平地はわずかしかない。人口は65人（男性37人、女性28人）、世帯数は26戸の小規模な集落である。（1995年10月1日現在）だが住民は「美山町の中で芦生という地域は高齢化率が下から2番目、若い子が一番多い村」と語る。（美山町総務課：1996. p19）

芦生地区の住民は歴史的に林業、薪炭業を生業としてきたが、（福田：1986. p19）現在ではほとんどの住民が1963（昭和38）年に設立した「芦生なめこ生産組合」で山菜加工をして働いている。この生産組合は林業、薪炭業が衰退していくなか、なんとかこの地域で生活していけないかと地元の有志により設立されたものである。設立時から軌道に乗るまでかなりの苦労があったものの、現在では売り上げが一億円を超えるまでに成長した。⁵⁾ この芦生なめこ生産組合は、「（まわりが）山ばかりなので、ほとんどが山にこだわった商品」であり「山をキーワードに商品づくりをしています」「芦生の原生林の恵みを芦生なめこ組合で加工して販売することが私たちに課せられたものだと思います」という考えのもと運営されている。

語られる芦生

昨今の自然志向ブームもあり、本事例である芦生は様々な面で語られることが少なくない。この章ではそれらの語りの中から、三つの語り、現地で語られる「ツアーガイドの語り」、マス・メディアを通じて語られる雑誌『AERA』の語り、最後に学術面から、それも人文社会科学的な面から語られる「内発的發展論の分析を元にした語り」を芦生においての調査から得られた知見を元に批判的に考察していくことにする。

ツアーガイドの語り

現在公式な形での⁶⁾芦生原生林ツアーは町の運営する宿泊施設「河鹿荘」か芦生地区にある宿泊施設「芦生山の家」⁷⁾に申し込み、資格を持ったツアーガイドが同伴し説明を聞きながら原生林を散策するという形が取られている。「河鹿荘」側が企画運営するツアーは小規模ながら広告を出し、6人のツアーガイド（IターンやUターンの人たちで行われている）の人たちの手で行われている。このツアーは芦生の山のすばらしさを都会の人にも知ってもらうとともに、過疎地の新しい産業（雇用と収益）として位置づけていこうと努力されている。

一方「芦生山の家」側が企画運営するツアーは主にこれまで「芦生山の家」を訪れたことのある人の口伝で、人的ネットワークによりツアー参加者を募る形を取っており、ツアーガイドは地元の芦生の人々かこれまでのダム反対運動や芦生地区の活性化をサポートしてきた京都大学の芦生ゼミ⁸⁾の学生によって行われている。こちらの方もツアーに参加し、芦生の山のすばらしさを多くの人に知ってもらうことを一つの目的としているが、それと同時にいかにしてこの山が守られてきたか、また今後この自然がダム開発などにより破壊されないようにしていくにはどのようなことが必要か等、ダム建設反対運動の延長線上に位置づけられている。

頻度的には「河鹿荘」側主催のツアーの方が一般向けに行われる広告や、町やその他との合同企画による集客力の差によって原生林ツアーを行うことが多

いようである。

この「河鹿荘」側主催のツアーに幾度か参加すると、芦生集落に近づく度にツアーガイドから毎回同じような話が語られる。それは、

「芦生の人たちは今も自然とともに伝統的な生活を送っています。」

という話である。⁹⁾

このような話は山に入る前の段階のいわば枕詞的に使用されているのかもしれない。「現代の山の民」でありたい、というツアーガイドの一人は芦生に住む人たちのことを次のように語る。

「芦生の人たちも山で、あゝいう山里で暮らすためには、非常に厳しい生活を強いられたりもすることもあるけれども、それなりに、そのいろんな掟を守りながら、今までずっと集落を守ってきた人たちの、そういう話だとか知恵だとか、そういうものをするっていうことで、芦生に住む人たちの、何というかな、息づかいみたいなものが、ガイドのなかで、伝わっていけばいいと思います。」

「また僕らがわからないような話をたまにしてくれたり、情報をねえ、教えてくれたりもしますし。」

このガイドは近代的な「便利さ」それ故の「簡単」な行いよりも、伝統的だと思える「工夫」、「知恵」による「豊かさ」を芦生に住む人たちの生活のなかに見いだしている。このような思いが、「芦生の人たちは今も自然とともに伝統的な生活を送っています。」という語り話の一端を担っていることが類推される。

美山町全体から見て芦生のある旧知井村地区は開発から「忘れられていた地域」(元町会議員)であり、芦生は先にも述べたようにその旧知井村地区内でも最奥の地であった。開発から忘れられた地域のまたさらに奥地にある芦生地区は、当然のことながら経済的にも厳しく、芦生に住む人々自身も、「芦生言うたら、地域の、美山町のなかでも貧乏な村や」、「川上から下へ行く人はおっても、下からわざわざ上へ来る人はおらん」¹⁰⁾と自嘲気味に話すような境遇の土地であった。

しかし、ツアーガイドの思いや語りは同じ美山町内からも「僻地」と言われるような土地に住み、経済的にも厳しい立場に立たされていた芦生の人々がこ

れまでとは異なった視点でとらえられ、異なった語り口で語られるようになる可能性を示唆する。実際、何度か芦生原生林にダム建設を推進し、そのことによって地域発展を遂げようとしていた町の行政もダム建設推進を事実上放棄し、美山町の新たな産業、交流産業の一つの拠点としての芦生原生林、食品加工業の先駆けとしての芦生なめこ生産組合、芦生原生林は、また芦生集落は産業振興上重要な位置を占めるようになっていく。

この、「芦生の人たちは今も自然とともに伝統的な生活を送っています。」という語りについてももう少し考察してみたい。まずそれは、芦生を訪れるツアー参加者、すなわち都市に住むものに向けて発せられる語りである。それは「私たち」・「都市に住むもの」に対峙する形で「芦生の人たち」・「地方に住むもの」という語りである。ここで、「私たち」と「芦生の人たち」とまず区分される。そしてその区分を明確にするような、より差異を強調する形で、都市に生きる私たちにに向けて芦生の人たちは「今も自然とともに伝統的な生活を送る」と語られる。

都市に生きる私たちは、「自然とともに伝統的な生活を送る」芦生の人たちとは異なり、それと相反するような「人工的なものとともに近代的な生活を送る」というような語が該当する状況に在るだろう。「自然」／「人工」、「伝統的」／「近代的」、このような対比において、ツアーガイドの語りは後者よりも前者の方が善いもの、というニュアンスで伝えられている。これはこれまでマイナスのイメージで芦生が語られてきたのがプラスに語られる転機であることには違いない。この話によって、ツアー参加者の「私たち」と芦生にする「彼ら（彼女ら）」は「自然」／「人工」、「伝統的」／「近代的」、という違いによって異なる存在であると線を引かれることになる。

そしてこの語りでもう一つ留意したいのは「今も自然とともに伝統的な生活を送る」という「今も」という語である。ここで「今も」という言葉は過去からの今、現在までの継続を表す言葉として用いられている。この「今も」という言葉に相対する語として過去からの継続をうち消し、現状を表す言葉として「今は」という言葉をあててみたい。すると、「今も自然とともに伝統的な生活」のなかにいる芦生の人たちに対して、私たちは「今は人工的なものとともに近代的な生活」のなかにいる。だが、「今は人工的なものとともに近代的な生活」

のなかにいる私たちだが、過去との継続を考えると「昔は自然とともに伝統的な生活」のなかにいた、或いはいたと考えられることができる。つまり、芦生の人たちの「今」は私たちの「昔」なのである。

今を生きる私たちにとって、芦生の人たちは私たちの昔を、過去のなかに生きる人たちとして語られる。このことは、都市と地方と言った地理的、物理的距離の隔たり以上に、時間的な隔たりによってより一層異なる、違う存在であるということを強く語られていることになる。それは芦生を訪れる側と芦生に住む側との間に明確に線を引くことになる。

このような芦生についての語りは、なにもツアーガイドのみが行っているわけではない。「私たち」／「彼ら（彼女ら）」の間に線を引くような構造がもっと端的に表現しているものがある。

AERA

朝日新聞社の発行する『AERA』1992年11月10日号では「NATURE SPECIAL 京都の秘境 芦生原生林」という特集が組まれている。（AERA 編集部：1992. p35-48）この特集は「植生の十字路」のさざめき、「キノコ探検隊が行く」、「赤道からの旅人」、「丹波の地霊」の四つのパートから構成されている。「植生の十字路」のさざめき、「キノコ探検隊が行く」では、芦生原生林の植生の豊かさが語られ、「赤道からの旅人」では地質学的に芦生原生林の成り立ちが説明されている。そして最後の「丹波の地霊」で芦生の山で生きる人の暮らしが紹介されている。

このパートでは美山町に住む「豊かな自然への深い畏敬とともに生きる」Kさんのマツタケ狩りの話から始まり、地元の歴史的、文化的な背景が語られている。

深い山に分け入って雨に濡れながらKさんがマツタケを取って帰ってきた。すると奥さんが

「2つちょうだい？」

とねだった。

「今すぐ雑炊、つくるから」

7本ともしっかり笠を閉じた上物ばかり。

～ 中略 ～

「でも、私はこんなもの、くわないですよ」

マツタケ、マツタケと有り難がる都会人を軽蔑したふうだ。

仲買人が来た。右手に秤、左手に大きめのいどこ。雑炊に取られた残りの5本を秤にのせる。

240グラム、1万8000円。

このような地元住人のやりとりが語られるなか、地元の歴史的、文化的背景が語られる。

マツタケ狩りは「山持ちだからといって、勝手に自分の山に入れない」。「自然の恵みはみんなの共有財産という思想」があり、「自然の懷に溶け込んだ生き方が、この土地の住人の美意識の底に、脈々と生きつづけている」。(同上：p46)

美山・芦生を含む丹波地方は

古くから鬼や魔性の棲みかとして、都人から「異界」のごとくおそれられてきた。

鬼たちは、ある時は都に反抗し、またある時は怨霊となって祟るという恐ろしげなイメージが重ねられている。

～ 中略 ～

都人から恐れられたこのような「異界」性は、上田正昭氏によれば、逆に強烈な自負となって丹波の人間を突き動かしてきたのではないかという。そしてこのパートは、現在この「異界」に住む住人は

誰もが山とかかわって生きているこの町で、山の神を畏敬しない者はない。

～ 中略 ～

人々が畏敬をおぼえる丹波のそうした風土は、根をたぐれば、自然の豊かさ、つまり深い森や林、矢のように走る溪流、峰から峰へと生き物のごとく流れる青い山霧、そしてそれらが与えてくれる無尽蔵と言ってもいい恩恵への、人々の恐れと慎みの気持ちを反映している、と考えることができる。

とまとめられている。(同上：p48)

はじめのマツタケに関する話は、どのようなことを物語っているのか。マツ

タケは都会人が「マツタケ、マツタケと有り難がる」ものだと言われ、すぐ後に、そのまま値段が記されている。これは当然のことながら、このマツタケは都市的な価値、経済的なものを代表するものとしてとらえられている。その都市的な経済的価値を地元に住むKさんは、「でも、私はこんなもの、くわないですよ」と否定し、その価値を持つ「都会人を軽蔑したふうだ」と語られる。またKさんの奥さんは都市的に高い交換価値を持つマツタケを、特別なものではなく、日常的な、些末な「雑炊」に使用する。

ここで語られるKさん、そしてKさんの奥さんは、都市的な価値、経済価値に左右されない人たちであり、また経済的な価値に左右されることを軽蔑するような人たちとして描かれている。Kさんたちは都市的な経済的価値のかわりに「共有財産という思想」、「自然の懷に溶け込んだ生き方」を持ち生きていると説明されている。

つまり、これはツアーガイドの話でも語られた、「今も自然とともに伝統的な生活を送っている」人たち／「今は人工的なものとともに近代的な生活送っている」私たち、という線引きを、さらに価値の面から、「私たち」の都市的な価値、経済的価値と異なる「彼ら（彼女ら）」の価値を表象し、より一層「私たち」／「彼ら（彼女ら）」と線を引く話になっている。

「自然とともに」暮らす環境、「伝統的な」生活、経済的な価値に重きを置かず生きている人たちは、それらと反するような生活様式を持っている「私たち」からすれば、まさに「異界」に住む異人であるといえる。

だが、芦生に住む人たち、あるいは芦生周辺に住む人たちは、「異界」に住む異人なのだろうか。

「今も自然とともに伝統的な生活を送っている」とされる芦生の集落の、京大芦生演習林にごく近い、ある民家には衛星放送受信用のパラボラアンテナが設置されているのが目に止まる。また芦生なめこ生産組合はインターネットで自分たちの商品を紹介し、eメールによって問い合わせを受け付けている。¹¹⁾

衛星放送やインターネットと言った情報通信分野の先端的なものだけではなく、当然のことながら電気は通っているし、テレビや冷蔵庫と言った家電製品も芦生にはあり、それら電化製品を使いながら生活している。日常の交通手段として車やオートバイも地元の人は使うし、芦生集落の生活を支えている芦生

なめこ生産組合は、小規模ながら街の工場と変わらない近代的な設備を備えている。

都市と異なる価値観を持って生活しているよう語られる芦生に住む人たちも自ら商業活動を行い、景気に左右されながら売り上げの増減に頭を悩ませている。小さい子供を持つ親は「教育の面はやっぱり心配」、「一番心配なのは教育」だと語り、大きな子供を持つ親は子供を都会の大学に通わせ、学費や仕送りの面の苦勞を語っている。

芦生で暮らす女性は、自らのことを次のように語る。

「こんな山奥に嫁にきたなってよく言われるし、自分自身も何でこの山奥に来ることになったんかよく思うけど、それ程、違和感がない。

～ 中略 ～

どこに住もうと一緒じゃないですか。たまたま、嫁にきたところがここで、ここがなめこをしていた。側に西日本で唯一といわれる原生林であったと。それだけの事、それを町からきた人が特異な目でみてしまうのは……………」

都市と芦生に関して違いについて芦生に住む人たちは、「文化的なことができない」、「ぶらっと本屋に入って立ち読みをする」ことや、「映画を観たり、音楽鑑賞はできない」、などの不満を語ってくれた。また日常の生活の上で病院や保育園などの面は都市のようにすぐに行ける距離になく、地元の人は、車の運転に慣れない人は、「命がけ」で車の運転をして子供を病院や保育園に連れて行くと笑いながら話してくれた。

地理的な、物理的な意味で都市と地方とは抗いがたい隔りがある。しかし、地理的・物理的な意味での都市と地方の隔りから生じる芦生に暮らす人々の不満は、彼ら（彼女ら）が地域的な隔りを越え、都市に住む私たちと同じ価値を共有していることを物語っている。

芦生に住む人たちも現代の資本主義社会において、不可避免的に資本主義活動に組み込まれ、一生産者、一消費者としての役割を担わされることになり、一生産者、あるいは一消費者として、そのシステムから逃れることは出来ない。一生産者としての芦生の人々は市場と直接に関わり、景気の動向によって芦生なめこ生産組合の売り上げが各家庭の、各個人の収入に、その生活に影響を及

ばす。一消費者として芦生の人々はマス・メディアを通じて拡散される消費的欲望を持たずにいられない。

また資本主義のみならず、現状の日本では教育や学歴に対する関心の高さは芦生も無関係ではないことが、先ほどの芦生に住む人たちの意見からも伺える。日常生活において、電気やガス、水道、移動手段としての自動車、生業を支える食品加工技術、医療や保育といった制度など、近代的と思われる技術や制度を拒んでは生活していくことはかなわないのである。

それでも芦生には「伝統的な生活」があるのかもしれない。だが、芦生においてもその「伝統」は近代的なものと共存していることに違いはなく、近代的なものと共存している伝統的なものは山村の芦生にのみ在るわけではない。都市の、例えば京都にもえてして日本の伝統と言われるような伝統が在ると言われ、都市としての代名詞でもある東京にも伝統的と言われるような江戸文化が今もいきづいていと語られている。

そもそも、伝統と言われるものに対立するような形で近代的と言われるようなものの線はどこに引くことが出来るのだろうか。

また『AERA』で紹介されたようなKさん夫妻のような方はいるのかもしれない。しかし、そのような存在をもって芦生集落、あるいは芦生の山に関わる人たちすべてを語ることは出来ない。『AERA』の記事では「山の神を畏敬しない者はない」、「(芦生の山が)与えてくれる無尽蔵と言ってもいい恩恵への、人々の恐れと慎みの気持ちを反映している」と語られているが、このような記述だけで芦生の人々を語ることは出来ない。

先述したように芦生原生林には幾度となくダム建設計画が持ち上がった。この計画に対して芦生原生林の所有者である九ヶ字財産区管理委員会では、芦生地区を除いたすべての地区の代表がダム建設に賛成し、1979（昭和54）年にはダム建設実現を公約にした町長が当選している。

『AERA』で語られているように「山の神を畏敬」し、芦生原生林の「恩恵への、人々の恐れと慎みの気持ち」を地元の人たちが持っていないということは出来ない。だが地元の人々のこのような思い以上に、現状の日本のシステムのなかで実際に生きて行くこと、生活していくことは過酷なものがある。ダム建設賛成派の人たちは、過疎化、高齢化に悩む町を救う手だてとしてダム建設に

よってもたらされるであろう経済 効果・補償金にすぎなければならない現状があった。それは美山町に限らず、全国の中山間地域農山村が抱える問題である。

ダム建設に一貫して反対してきた芦生集落の人たちにとっても問題は同じことである。「山はきれいやって言うても、メシは食えませんやん」、「よそから見た人は芦生はきれいなところやなあ、ええところやなあ、そこにすんだる人は大変ですがな、たんぼも畑もあらへんし、どうしてメシ食うねや」と、芦生集落に住む人たちにとっても、生活していく上で当然経済問題は重要な位置を占める。その経済問題をなんとか打開するために芦生では芦生なめこ生産組合が設立されたのである。

内発的發展論による分析

芦生なめこ生産組合に関して坂本は鶴見の「内発的發展論」（鶴見，1989）を展開し分析を行っている。坂本は鶴見の内発的發展論を元に、内発的發展を、「いいかえれば内発的發展とは、地域固有の条件に対して考慮しつつ、地域住民が伝統に基づきながら、主体性をもって行っていくもの」（坂本：1996. p22-23）と規定している。ここで、坂本は「発展と伝統は一見すると相反した組み合わせのように思われるが、実はそうではない」と語る。坂本によればここで語られる伝統とは、「地域固有の条件の中で生活してきた先人の知恵の体系」であり、それに新しい知識と照らし合わせることにより、「組み替えられていくもの」を指すことになる。（同上：p23）¹²⁾

これらを踏まえ坂本は

その誕生の背景を考えれば、人々が芦生に住み続けることを選んだからこそ、「芦生なめこ生産組合」が存続しているのだという方がより正確であろう。つまり、「芦生なめこ生産組合」は、芦生に住み続けるという人々の選択の結果生まれたものであり、その意味では「芦生なめこ生産組合」は地域に住み続けるという、内発的發展論の基本前提を満たす為の手段と考えられるのである。

と分析を行っている。（同上：p36）

また、芦生なめこ生産組合は前述したように1963（昭和38）年に設立されて

から経済的に軌道に乗るまでかなりの困難があった。芦生なめこ生産組合設立時のメンバーは当時を振り返り、「売ろうとしたんやけど、売れません」、「なめこなんか金になりゃしませんわね」、「ああ、なめこもあかんのかなと思っとたんです」と当時の状況を語る。その時期に何組かの家族は芦生で生活をしていくことを諦め、去っていった。

このような状況下で、現在も芦生なめこ生産組合を続けている人々の「迷いを押しとどめたのは、理屈では計り知れない地域への執着である」（同上：p36）と坂本は述べ、そして芦生なめこ生産組合が経営的により軌道に乗り始める要因を「一九七〇年代に入って自然食品ブームが起こってようやく、『芦生なめこ生産組合』の商品が売れはじめたのである」（同上：p35）と分析する。

そして、「芦生なめこ生産組合」を基本前提とした芦生の内発的発展論は、「山村衰退の原因となった地域政策に、また都市的価値が支配的な現代社会に対して、異議申し立て」であり、「対抗理論」としての存在意義を持つと論じている。（同上：p40）

坂本の述べる「対抗理論」としての「内発的発展論」の基本前提となる芦生なめこ生産組合設立の要因として、坂本は芦生の人々の「地域に残りたい」、「『芦生で暮らしたい』という強い思い」を全面的に取り上げ、その動機付けを執拗に繰り返し述べている。（同上：p36）

坂本が立脚している鶴見の「内発的発展論」ははなはだ議論の余地の多い論だと考えられる。坂本は鶴見の内発的発展論を「固有の自然生態系に適合し、文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出する」ものだととらえている。（鶴見：1989. p49）ここで述べられている「伝統」、そして「自律的」とはどういったものだろうか。これらの言葉はかなり複雑な意味を持つ言葉である。

坂本は「伝統」というものをこれまでの知識と新しい知識と照らし合わせ、組み替えられていくものと述べているが、仮にここで言われる伝統がそういうものであるならば、人々が生活していく様式について、あえて伝統という言葉を用いる必要があったのであろうか。

つまり、ある集団がその集団内で過去から行われてきた生活様式などをその

集団の伝統と呼び、その集団が自らの集団と異なると認める他集団と何らかの交流を持つならば、その交流を通じて集団間の相互作用により、それぞれの集団の生活様式は互いに影響されあい、変化をもたらすことだろう。このような相互作用、坂本のいうところの「組み替え」は伝統的に行われる。よって「伝統」と言われるものは一筋ではなく、いく筋もの様々な組み替えによって構成されていることは違いないだろう。

坂本の「伝統」についての考えをもちいるならば、近代的なものと思われる何某かの様式を選択も伝統ということになる。ある集団の生活様式、知識と異なる外来の「新しい知識と照らし合わせ、組み替えられていく」過程において常に生じる「伝統的」なるものは、坂本自身が述べるように「発展と伝統は一見すると相反した組み合わせのように思われるが、実はそうではない」、もう少し踏み込んで言うならば「伝統的」なるものと、そうでないものとの区別は明確に付けることが出来ないものではないだろうか。

このように「伝統」という言葉は幅が広くつかみ取りにくい言葉であり、また、「伝統」という言葉自体が持つ魅惑的な意味により要らぬ誤解をも生み出しやすい言葉でもある。坂本の論のなかで「伝統」という言葉を使わなくても坂本の主張は十分に述べられるものであり、それならば「発展」あるいは「近代」と対立するような感のある「伝統」という言葉を用いるのは、はなはだ蛇足的ではないだろうか。

次に、鶴見の内発的発展論における「自律的」という言葉、坂本はこれを「主体的」という言葉に置き換え、芦生における内発的発展論の基本的前提となる主体的な手段として芦生なめこ生産組合に注目する。その芦生なめこ生産組合は「どうしても芦生に住み続けたいという、地元住民の強い感情から生まれてきたということがいえよう」と、主体性の動機付けを強調する。

たしかに、この「芦生で暮らしたい」という動機付けは芦生の人たちの集約した意見として芦生の人たちが現在も続ける運動のなかで一貫して語られている。だが、この集約した動機付けは、意見は、芦生に住む個別の人たちの思いが、動機付けが、幾重にも重なり合って形成されている。

現在芦生なめこ生産組合の中核的な存在である一人は当然芦生の自然環境を守ることに重きを置いているが、それ以上に芦生の集落で暮らす人たち、そ

の人たちの生活を共に守っていくこと、遠くで困っている人たちを助けるのも立派だが、そう遠くない、同じ国内で困っている人たちを助けながら生きていくのもそれと同じくらい意義のあるものとして、自らのことを「海外青年協力隊のようなもの」と語る。

また、同じように中核的な存在である一人は「やっぱり、親父が苦勞して、がんばってやってきたこと、俺もやっていかなあかんやないけ」、と語り、また別の一人は「芦生に生活して、おじいちゃんのやってこられたことを側でみてたり、『守る会』の作られたものを読ませてもらったり、芦生ゼミの子達や『守る会』の人たちがここで会議しているのを、そういうのを見ていく中で、芦生で暮らしたいという思いが強くなったと語る。

現在芦生なめこ生産組合は第二世代と言っていような世代の人たちが中心になり運営されている。この世代の人たちは自らの生活について「贅沢はできないが、そこそこの生活はできている」、「生活が安定」しているという。それは前の世代がやってきたこと、苦勞して築いてきたものがあつたおかげであるという。そしてそういう思いが、これまで前の世代が積み上げてきたことを無にすることは出来ない、芦生で暮らし続けて行きたい、という形であらわれている。

このように第二世代の動機付けの核を形成するのに影響を与えた、芦生なめこ生産組合設立時のメンバーや、その当時の芦生に暮らしていた人たちの「芦生で暮らしたい」という意味はこの第二世代と様相が異なる。芦生なめこ生産組合設立時のメンバーや、その当時の芦生に暮らしていた人たちは「出て行くにも、能力がなかったからね」、「甲斐性がない」、「技術を持ってまへんでしょ、だから都会へ出たかってなかなか生活できへんわね」、「明日から何をするちゅうたら何も出来ませんわな、仕事。自分が生活する糧がないですわな」と、異口同音に出ていかなかったわけではなく、出ていけなかった、と語る。

また現在の中核的な存在の別の一人は、これら設立当初の状況について「ちょっと小金持ってた人は芦生からみんな出ていってしもうた。出られなかったうちの親父筆頭として、出られなかったものが残った」と語る。

これらのことからわかるように、芦生の内発的発展の主体性の現れとしての、その動機付けとしての、「芦生で暮らしたい」という思いには、大別して二つ

の意味がある。一つは現在の中核的存在である第二世代の、これまで前の世代が芦生で築いてきたものを無くしたくない、引き継いでいきたいという意味での「芦生で暮らしたい」という思い、そしてもう一つが他なところへ行くことが出来ない、だから「芦生で暮らしたい」という意味である。前者が積極的にその動機付けを行えるのに対して、後者は消極的に、もう少し言えば後ろ向きの選択としてその動機付けを行わざるを得なかった、というものである。

そもそもどうしてこのような選択をしなければならないのであろう。芦生の人々は歴史的に林業や薪炭業を生業としてきた。それが、彼らの意図しないところで、関知しないところで、その生業を代えなければならない事態（林業不況やエネルギー革命）が起こったのである。決してこの事態の影響なしに、主体的に生業を代えたわけではないであろう。まずこの時点で生業を変更する選択が強いられた。次に、「芦生で暮らしたい」という坂本のいう主体的な思いも、これまで述べてきたように経済的な、生活するうえでの生業に関する要因による意味づけが強い。坂本は、経営が軌道に乗る以前の芦生なめこ生産組合内に葛藤があり、この迷いを押しとどめたのを、「理屈でははかり知れない地域への執着」だと述べている。だが、この地域への執着も経済的要因が大いに影響していることが考えられる。設立時のメンバーは、

「もう、これも止めよかなあって思うことあったですよ、途中でねえ。いやぁ、これ止めたらどうして食っていけるんやろなぁ、ということもね、先立ちますからぁ。」

「一緒にやっても、先が見えへんと。出ていこうかなと。市内に親戚でもおったらね、また、こいとか言われてたらね、人は出ていく。」

と語る。

当然、芦生で暮らす人たちは自分たちに出来る限りの、あるいは今から振り返ると出来る以上の苦勞をして、試行錯誤をし、もがきながら現在の経済的成功に結びつけたのは確かなことであろう。だが、その成功の一端も生業の変更を選択させられたときと同じように、自分たちのあずかり知らないところからの影響が考えられる。¹³⁾

坂本が述べているように、芦生なめこ生産組合は、芦生に住み続けるという人々の選択の結果生まれたものであり、内発的発展論の基本前提を満たす為の

手段と考えられることに違いない。だが、この芦生で暮らすという選択には、積極的な意味と消極的な意味がある。そして一見主体的に見える選択も、実は消極的に選択せざる得なかった、選択することを強いられていた、ということがうかがい知れる。

三つの語りから

これまで、芦生についての三つの語り、ツアーガイドの話、雑誌『AERA』の記事、坂本の内発的發展論を用いた芦生地域についての分析、を批判的に考察してきた。その結果、これらの三つの語りは共通点を持つことがわかる。まず、この三つの語りはどれもが「伝統的」というものが芦生を語る上で重要な位置を占めている。ツアーガイドの話では、近代と、近代的な生活様式と対立する概念として、雑誌『AERA』の記事、では近代的な価値、経済価値と対立するような形で、坂本の分析では地方の内発的發展、都市に対する対抗の理論のよりどころとして用いられている。

これらのなかで語られる「伝統的」とはなんなのであろう、どうしてどの語りも同じように「伝統的」というものにこだわり芦生を語っていくのであろうか。ホブズボウムは、「『伝統』とは長い年月を経たものと思われ、そう一般に言われているものである」という。つまり、一般的には「伝統」という言葉が使われるときに我々は無意識のうちにそれが「遠い昔から受け継がれてきたもの」と受け止めてしまう。(ホブズボウム：1992. p12) その時「伝統」と呼ばれるものは昔から妥当してきた様式であり、神聖性と正統性を纏い誰もが受け入れやすくなる、自発的に服従しやすくなるような魅惑的な言葉になる。

また「伝統」とは時間の経過を表す。時間の経過とは現時点から振り返って過去のことである。「過去（伝統）」は坂本がいうようには常に組み替えられていくものであり、常に現在から過去を振り返るものによって再構成されていく。これは太田のいう「文化の客体化」の概念においても同じ構造を持つ。(太田：2001)

太田によれば、文化の客体化とは、文化を操作できる対象として新たにつくりあげることであり、その過程において民族の文化として他者に提示できる要

素を選び出す必要性があるため選択性が働くことである。選び出された文化は、たとえ過去から継続して存在してきた要素であっても、それが客体化のために選択されたという事実から、元の文脈と同じ意味を持ち得ず、伝統的とみなされてきた文化要素も、新しい文化要素として解釈し直されていることを意味する。(同上：p72)¹⁴⁾

つまり、現在から見て過去は既に行われたことであり、体験したことである。この既に行われた、体験したことのある出来事は、冷静にとらえなおすことができる。そしてそれをさらに語り直すことは、ある出来事を任意に取り出し、それを強調し増幅させたり、ある出来事を切り捨てたり、ことなる意味で解釈し直すこともできる、操作可能なものとなる。

そのような操作可能なものとして過去は再構成され不安定な要素は排除することが可能な安定した時間であるのに対して現在から未来を観たとき、それは未だ行われていない、予期することが出来ない、不安定な時間である。この既に過ぎ去ってしまっていて現在では手の届かない安定した時間、過去（伝統）は不安定な時間をこれから迎えるものにとって、美しい幻想として語ることが可能であり、そこに人々の郷愁を誘うことになる。この既に過ぎ去ってしまい、現在では手の届かないはずの過去に対する郷愁が、幻想が、現在において「伝統」を欲し、そしてその時間的経過という認識から浮かび上がる神聖性と正統性によって、「伝統的」というものが受け入れられていると考えられないだろうか。

そして、幻想としての、幻想のなかにしか存在しないはずの「伝統」が在る場所、それを具現化するものとして芦生は表象されているのではないだろうか。

このような「伝統的」なるものを軸に、芦生についての三つの語りはその共通した構造を持っている。

芦生についての三つの語りはどれもはじめに芦生を表象するものとして伝統的＝自然・地方という言葉が私たちに提示される。それらと対立するかたちで私たちは、近代的＝都市・中央という言葉に置き換えられる。これらの対立的な語はまず、都市に住む私たちと、芦生に住む彼ら（彼女ら）との間に、私たち／彼ら（彼女ら）を区分するため、線引きを行うための理由として用いられる。それは芦生に住む彼ら（彼女ら）は都市に住む私とは、異なる地域に住み、異なる文化を持つ人たちは、我々と異なる人たちだ、と認識に導いていく。そ

の結果、異なる人たちと認識された彼ら（彼女ら）には先程述べたような「伝統的」なるものを担わされ、具現化した存在とされ、再び「伝統的」というかたちで浮き上がってくる。

つまり、これらの語りでは、はじめに線を引く理由として用いられたはずの「伝統的」というものが、線を引いた結果として再び「伝統的」として語られるトートロジー的な構造になっている。

サイドは、次のような指摘を行っている。「オリエントは、ヨーロッパ（つまり西洋）がみずからを、オリエントと対象をなすイメージ、観念、人格、経験を有するものとして規定するうえで役立った」。（サイド：1993. p2）これまでの芦生についての語りの構造にあてはめるならば、語りのはじめにあらわれる、私たち／彼ら（彼女ら）という線引きに、また、

オリエントがオリエント化されたのは、十九世紀の平均的ヨーロッパ人から見て、オリエントがあらゆる常識に照らして「オリエント的」だと認知されたからではなく、オリエントがオリエント的なものに仕立て上げられることが可能だった。つまりオリエントはそうなることを甘受した一からでもある。しかしそこには、ほとんど合意というものが見出されない。（同上：p6）

これは、線引きの結果としてあらわれる「伝統的」に対応する。

芦生が「伝統」として仕立て上げられてしまうこと、「自然とともに伝統的な生活」を送り、「自然の懷に溶け込んだ」「美意識」が「脈々と生きつづけ」、「地元に残りたい」という強い思いが「都市的価値が支配的な現代社会に対して、異議申し立て」できるだけの「対抗理論」を持つと表象されることにより、様々な問題が覆い隠されてしまうこととなる。

芦生の人たちは「今も」「伝統的な生活を送っています」と語るにより、芦生での生活の日常性、近代的と言える機器や設備に囲まれて送る生活が、またそのような近代的なものなくしては生活していけない日常が見えなくなる。都市的な価値、経済的な価値としての「マツタケ」を拒否し、「軽蔑したふう」だと語り、「自然の恩恵」、「共有の思想」を対抗する価値としてあらわすことにより、地方の経済的貧困が、都市的と思えるような欲望が見えなくなる。「主体性」や「伝統」を強調するあまり、外部からの影響に身を委ねなければ

ならない地方の実状や、強制的に様々な選択を迫られている葛藤が見えなくなる。

これまで何度も述べてきたように、都市に住む私たちと芦生に住む彼ら（彼女ら）はまったく異なる価値を持ち、異なる生活様式のなかに生きているわけではない。伝統を強調して私たちと彼ら（彼女ら）の間に線を引くことはかなり困難である。現在の日本では、ある集団が全くことなった価値や様式をもって生活することはほとんど不可能に近いであろう。都市であろうと地方であろうと複雑に絡み合った経済システム、あるいは近代というものから断絶して存在しているわけではなく、その中の許される範囲内の選択肢を選びながら生活していることに変わりない。だが確かに都市に住む私たちと芦生に住む彼ら（彼女ら）の間には地理的な物理的な隔りがある。そしてそれ以上に大きな隔りとは、都市と地方、この間に存在する支配関係、権力関係である。

このような関係はサイドの弁を待つまでもなく、政治的である。先ほど引用したサイドの言葉からもわかるように、都市と地方との関係は内なるオリエンタリズムである。そう、「オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式」（同上：p4）であり、これまで見てきた芦生に対する三つの語りに共通する「伝統的」なるものは、内なるオリエンタリズムとして都市と地方の関係において、地方を支配し再構成し威圧するための都市の様式の一つとして機能する。

戦後、都市と地方、特に都市と芦生に関して、都市側は様々な需要、演習林用地・エネルギー（薪炭）・木材・労働力・公共事業施行用地、の供給を芦生に強いてきた。そしてこんどは自然、そして幻想としての伝統の需要を芦生が供給することを求めている。

このような関係を太田はフーコーの言葉を用いながら観光という現象を通して、観光を担う地方の人々に対するステレオタイプや偏見は、観光という力関係の行使によって具現化される。この観光のつくりだすイメージはそれを担わされる人々の誇りを傷つけてしまうが、経済的に観光に依存している人々にとって全面的に否定できない状況にある。だが、このように押しつけられるイメージがただのイメージでしかないという批判的認識を生み出すことを可能とする、と述べ（太田：2001. p74）、この批判的認識、その可能性として遠野市の事

例¹⁵⁾ から、一見一方的に役割期待を押しつけられているように見える地元の人も、それを意図的に「演技」することによって、その虚構性を主題化し、その状況を中和する可能性を保留していると述べる。(同上：p78)

まとめ

本稿では芦生についての三つの語りから、その三つの語りの持つ「伝統的」という共通性、語りの構造についての共通性を指摘し、サイドの述べるオリエンタリズムとの類似性をとらえ、そこに見られる政治的・支配的な権力関係について考察してきた。そして最後にこの権力関係を観光という現象を通して「中和する可能性」を模索する試みとして太田の論を取り上げた。

太田は終始、文化の客体化によって創り出された文化によって現地の人々が主体的に自らのアイデンティティを構成していくことに観光の持つ、見るもの（強者）／見られるもの（弱者）という力関係を中和していく可能性を訴える。さらに、社会の周縁に生活していた人々が、ようやく自己の主体性を回復し、肯定的な自我像を形成し始めているときに、その主体性を否定する語りだけは排除しなければならない。なぜならば観光という力関係を中和しようとする地元側の努力を追放することになるとも語る。(同上：p91)

太田のいうように、力関係を中和していく可能性はあるだろう。だが、どうして常に地方の側が要求に応えなければならないのだろう。たしかに、力関係によって何らかの選択を強いられる過程において、強いられる側は、その選択の虚構性に気づき、批判的認識を持ち得るかも知れない。そのことによって自らの像を操作しながら新たに作り替えることも可能なのかも知れない。けれども、その強いられる側の操作が巧妙であればあるほど、強い側は自らが作り替える選択を強いられる側に強いたことに気づかないまま、無自覚に自らが強いた選択を、さも強いられる側が当然主体的に選択したかのごとく受け流してしまう可能性も残ったままである。

それならば、そのように強い側が自らの支配性、権力性に無自覚でいつけるならば、また再び異なる選択を無自覚に強いられる側に強いのではないだろうか。もしそうであるならば、強いられる側は常に強い側の無自覚さに

よって、自らの像を作り替え続けなければいけない状態に追い込まれることになる。太田は強いられる側が肯定的な自我像を形成し始めているときに主体性を否定する語りだけは排除しなければならない、と述べるが、その肯定的な自我像を形成する過程において、あるいは形成された後でさえ、強い側は常に自省的にそこに介在する権力性に対して、批判の目を向ける必要があるのではないだろうか。それは時として、否定する語りを含む可能性のある語りでさえ、必要な場合があるのではないだろうか。

注

- 1) 1988(昭和63)年「第3回農村アメニティーコンクール優秀賞」受賞, 1991(平成3)年「第1回活力ある美しい村づくり21世紀村づくり塾長賞」受賞, 1993(平成5)年「過疎地域活性化優良事例国土庁長官表彰, 「第1回美しい日本のむら景観コンテスト農林水産大臣賞」受賞, 1994(平成6)年「豊かなむらづくり」農林水産大臣賞受賞, 1995(平成7)年「手づくり郷土賞建設大臣賞」受賞, 2001(平成13)年優秀観光地づくり賞金賞国土交通大臣賞。
- 2) 美山町役場では「観光産業」のことを「交流産業」と呼ぶことで統一されている。
- 3) これ以後, 1965(昭和40)年関西電力が若狭湾の原子力発電所の夜間余剰電力を有効利用する目的として挙原揚水発電所計画が計画され, 幾度となくダム建設に関する交渉が持たれた。
- 4) ダム問題の経緯については, 芦生の自然を守り生かす会, (1996)が詳しい。
- 5) 芦生なめこ生産組合の経緯については坂本, (1993)が詳しい。
- 6) 京都大学芦生演習林演内ツアーに関しては, 京都大学側が講習を開き, それに参加したものにツアーガイドの資格を与え, 資格のある者の引率によってツアーが行われる決まりになっている。
- 7) 正式名称は「京都府芦生青少年自然の家」と言ったが, 現在は京都府から美山町にその所属が変わり, 名称も「芦生山の家」となった。現在美山町はこの「山の家」を芦生集落に運営管理を委託し, 芦生集落の住民が独自に運営している。
- 8) 京都大学の学生により, 芦生地区におけるダム建設反対運動を目的に1984年に設立された自主ゼミ。現在はダム建設反対運動だけではなく, 様々な面で芦生集落と交流を持つ団体。

- 9) ツアーガイドの語りには、マニュアル等があるわけではないが、二人一組になって回ることが多く、また何度かミーティングを重ねていくうちに、ほとんどのツアーガイドが同じ場所で同じような話をするようになった、とツアーガイドは言う。
- 10) 地方において、川上は山に近い周縁部であり、川下はその地方の中心部を指す。つまり、周縁から中心に人が移動することはあっても、中心部から周縁部へ人が異動することはないという意。
- 11) <http://miyama.kyoto-fsci.or.jp/5/5-3nameko.html> (2002年2月7日現在)
- 12) 坂本は伝統について次のように述べている。

伝統をその地域における「過去の知の累積」ととらえるならば、それは地域固有の条件のなかで生活してきた先人の知恵の体系である。よりよい暮らしのための知恵であるとも言えることができる。

～ 中略 ～

新しい知識を伝統に照らしあわせてみることによって、それぞれの地域に適した発展の方向が見えてくるからである。そしてそのような作業を通して伝統は組み替えられていく。(坂本：1996. p23)

- 13) 坂本も分析しているように、外的要因として1970年代にブームとなった、自然食品ブームが考えられる。
- 14) この芦生での事例は太田の「文化の客体化」という概念と密接に関係する。

太田はこの文化の客体化の事例の一つとして、沖縄県石垣市の海人(ウミンチュ)体験観光を挙げている。これは、沖縄を訪れる観光客が漁民たちの繰り出す船に同乗し、沖縄独特の潜水漁師の技術を見学するツアーに多く参加するようになってきた。また本土のマスメディアがリゾートブームと並行して、沖縄の観光、なかでも対する関心を示し、その結果そこで生活する漁民に注目ようになる。この事実は沖縄に住む人々の自己認識に大きく影響し始めることになった。漁民社会の祭りであるハーリー(海神祭)は地域を活性化させるイベントとなり、漁民の祭が沖縄文化の一つの象徴として客体化され意味を持つようになるにつれて沖縄の人々にとっても、海やそこで生活する漁民を除外して自らの文化を語ることが出来なくなってきたのである。その結果、沖縄社会で社会的弱者として位置づけられてきた漁民が自らの仕事に自信と誇りを持つようになった、というものである。(太田：2001. p 84-91)

この太田のいう「文化の客体化」概念の枠組みを芦生の事例に当てはめると、僻地に暮らし、美山町社会内で弱い立場にあった芦生の人々が、ダム建設によって失われそうになった環境を守り、山と共に生きてきた伝統と知恵によって、自らが興した芦生なめこ生産組合が経済的にも成功を収めた。かつ、自分たちが町側と対峙しながらも守ってきた芦生原生林が現在は美山の象徴の一つとして、また政策的にも経済的にも欠かせない存在となった。そして芦生に住む人たちが、芦生原生林を守ってきた存在として、芦生の自然とともに暮らす存在として、そこを訪れる人々に語られることは芦生に住む人たちのポジティブな自我像形成に大きな役割を果たしていることが考えられる。

- 15) 岩手県遠野市が、柳田国男の『遠野物語』を自覚的に自ら用い、一東北の市町村から柳田の『遠野物語』の遠野市として町おこしを行っていく事例。(岩本, 1983)

参考文献

- AERA 編集部：1992『NATURE SPECIAL 京都の秘境 芦生原生林』『AERA』朝日新聞社 芦生の自然を守り生かす会：1996、『芦生の森から』、かもがわ出版
- 岩本由輝：1983、『もう一つの遠野物語』、刀水書房
- エドワード・W・サイード：1993、『オリエンタリズム』、平凡社
- エリック・ホブズボウム：1992、「伝統は作り出される」『創られた伝統』、紀伊國屋書店
- 太田好信：2001、『トランスポジションの思想 文化人類学の再想像』、世界思想社 京都新聞 1998.6.17
- 坂本礼子：1996、「森林環境保全と内発的発展」『ソシオロジ』、社会学研究会
- 田中滋：2000、「政治的争点と社会的勢力の展開」『講座社会学9 政治』、東京大学出版会
- 鶴見和子：1989、「内発的発展論の系譜」『内発的発展論』、東京大学出版会
- 中井猛之進：1931、「植物ヲ学ブモノハ一度ハ京大ノ芦生演習林ヲ見ルベシ」『植物研究雑誌 17 卷5号』
- 福田栄治：1986、「丹波・美山町芦生の民俗 一衣・食・住と生業を中心に一」『近畿民俗』、近畿民俗学会

宮崎猛：1999, 「地域経営型グリーン・ツーリズムの経済効果」『地域経営型グリーン・ツーリズム』, 都市文化社

美山町：2001, 『京都府美山町における村おこしの取り組みと課題 第6回改訂版』, 京都府美山町

美山町史編集委員会：2000, 『美山町史（上）』, 美山町

美山町総務課：1996, 『美山町統計書』, 美山町総務課

(ゆかわむねき 龍谷大学大学院社会学研究科博士課程)

Problems which the representation
referred to as “traditional” has
— It is considering the Ashiu,
Miyama-cho area as one example. —

Muneki Yukawa

In this paper, based on the investigation which followed the Ashiu, Miyama-cho area, the tellings about Ashiu, the talk of a tour guide, the report of a magazine “AERA”, and the analysis of Ashiu carried out based on the inside-development theory and these three narrations are taken up, the invalid nature of the difference which is told in these three narrations and which was emphasized too much is discussed critically, and the structure common to these three narrations is analyzed. And paying attention to the language which is mainly used in common in these narrations and which is referred to as “traditional”, the meaning which this language referred to as “traditional” has is considered. Moreover, while the language referred to as “traditional” in the relation between a city and a country brings the problem, the rule relation to a city and a country and power relations concealed by the domestic orientalism are discussed reflectively and critically.

Keyword: Miyama, Ashiu, a city and a country, representation, tradition, rule, power